

昭和63年度

史跡浪岡城跡環境整備報告書Ⅰ

1989年3月

浪岡町教育委員会

発刊にあたって

史跡浪岡城跡は、南北朝時代南朝方の雄であった奥州鎮守府將軍北畠顯家の末孫が拠ったとされる中世城館として、現在でもその威容を留めています。

昭和52年度から昭和62年度までの発掘調査により、浪岡城跡の歴史的評価が高まってまいりました。現在、史跡の良好な保存状態を活かし、発掘調査成果を付加して町民及び全国の方々に歴史学習の場として利用していただけるよう文化庁の指導を受け、環境整備計画を進めておるところです。

昭和62年度より史跡環境整備事業に着手し、2年目にあたる昭和63年度は、整備工事車輛用仮設道路予定地を調査しました。数珠や塔婆の出土等、浪岡城で生活した人々の精神文化について触れることができた思いです。整備にあたり、形や機能だけでなく、この様な精神文化面も表現できれば歴史学習としてさらに価値の高いものになるものと考えております。

また、近接した場所に浪岡町歴史資料館を建設・開館の運びとなりました。浪岡城跡の整備と相俟って、さらなる活用を計画しております。関係各位にあっては、旧に倣しての御指導・御助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成元年3月1日

浪岡町教育委員会

教育長 蝦名俊吉

例 言

1. 本書は、史跡浪岡城跡環境整備事業として昭和63年度に実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、国・県の補助を受け、総事業費5,250,000円で浪岡町・浪岡町教育委員会が行った。
3. 発掘調査及び整理作業は、昭和63年7月4日から平成元年3月31日まで行った。
4. 本書は、本文4項目、挿図 (Fig.) 8枚、図版 (PL.) 15枚、表 (Ch.) 4枚で構成し、執筆は木村浩一が行った。
5. 遺構の略称は以下の通りである。
SH 堀跡 SA 中土塁跡
6. 遺構の土層注記にあたっては、「新版標準土色帖」小山正忠・竹原秀雄編著 (1976.9) を参考とした。
7. 本書の刊行にあたり、下記の機関・各位の御指導・御助言を得た。記して感謝申し上げます (敬称略・順不同)。
文化庁記念物課、県教育庁文化課、三浦貞栄治、工藤清泰、武田嘉彦、常田紀子。

本文目次

発刊にあたって

例言

I 環境整備に至る経過	1
II 環境整備計画について	1
III 昭和63年度事業について	3
IV 発掘調査について	5
1 調査経過	5
2 調査遺構	10
3 出土遺物	18
4 まとめ	31
写真図版	33

I 環境整備に至る経過

浪岡城跡は、15世紀後半から16世紀末にかけての中世城館である。浪岡北畠氏を名乗る一族が居住したと伝えられるが、現存する文献資料は、津輕藩政期に入ってからのものである。

城館は、浪岡町のはば中央、県道青森―浪岡線に面して位置する。南側の浪岡川・正平津川の河岸段丘を利用して、内館・北館・西館・猿栗館・東館・検校館・無名の館・新館の8つの館からなり、その保存状態は非常に良好である。8つの館は堀によって区画されるが、堀の中央部には、地山の掘り残しによる中土塁が存在し、堀自体を二重・三重堀の形態にしている。

良好な保存状態と北畠顯家の末孫が居住したと伝えられることから、昭和15年2月10日に国史跡に指定されている（Fig. 1）。その後、指定地内は、堀は木田、館平場は畑・宅地として利用されてきた。ただ、内館のみは、昭和15年に浪岡町（当時浪岡村）に寄贈され、「浪岡公園」として近隣住民が利用してきている。

昭和42年度から国庫補助を受け、史跡指定地の買収を始め、昭和49年度までに指定地総面積約136,000㎡の84%にあたる（寄贈地を含む）約114,800㎡を公有地化した。公有地化により、史跡環境整備の第一歩を踏み出したことになる。

昭和52年度には、環境整備を行うための基礎資料を得る目的で、町単独による発掘調査が行われた。結果、東館から独立柱建物跡が一棵と堅穴建物跡が一棵、及び堀から多量の木製品が検出された。昭和53年度からは、補助事業として昭和62年度まで発掘調査が行われたが、調査は主に内館と北館の平場を対象にし、北館の周囲の堀の一部も含め、多数の遺構と遺物を検出している。この調査により、北館には、「戦国城下町」といわれる木分化の城下町の原型がみられることが判明してきた。

これらの調査成果を基に、史跡整備を行うよう、昭和59年には環境整備基本構想が策定され、それを受け昭和62年3月には、基本計画が策定、昭和62年度からは環境整備事業が開始された。

II 環境整備計画について

浪岡城跡の環境整備にあたっての基本方針は、遺跡の保存・保護及び活用を図ることである。特に浪岡城跡においては、館の連立状態が現状ですでに把握できる程保存状態が良好である。この保存状態を活かし、活用してゆくために、館斜面の崩壊防止を最初に行うものとする。その上で、発掘調査において検出・理解されるようになってきた、北館・内館の建物等遺構配置を表示してゆく。堀については、現存する中土塁と、調査により判明した中土塁をある程度復元することにより、中世城館としての形態―堀により区画された平場の連立状態が明確に表現

Fig.1 浪岡城跡全体図

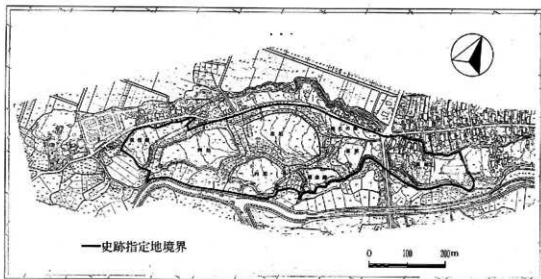
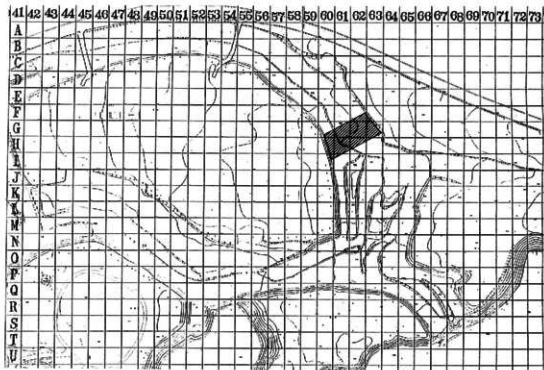


Fig.2 環境整備に係る発掘調査区域



斜線部は調査範囲

*グリッドのます目は1辺10m

できるよう配慮してゆく。

また、浪岡城跡全体をいくつかのゾーンに分け、それぞれに特徴を持たせた整備を行ってゆくことも考えられる。第一に、発掘調査の終了した内館・北館については、調査結果を活かした歴史学習の場としての整備を念頭に置く。次に未調査ではあるが、今後主出入口として活用してゆく検校館・西館については、十分な盛土等による遺構保護を図った上で、公園的な多目的使用のできる空間とする。猿楽館・東館・無名の館については、斜面・平場の保護を図った上で、年数回の草刈り管理とする。また、未買収地である新館については、現状変更時に対処するものとして、当面は現状維持区域として保存する。

これらのゾーン設定とは別に、史跡指定地外の周辺地区についても、建物の高さや色彩等の環境規制区域を設ける必要も生じている。

活用面では、さらに、南側に隣接する都市公園との相互利用や、近接する浪岡町歴史資料館との一体的な利用が考慮されている。

III 昭和63年度事業について

1. 事業経過

環境整備事業は、昭和62年度から開始しているが、初年度は史跡指定地の見直し及び史跡境界の確定作業を行った。結果、従来、史跡指定地面積215,800㎡、内公有地188,300㎡とされていたものは誤りで、指定地面積136,123㎡、内公有地114,820㎡であることが判明した。

昭和63年度事業では、次年度からの整備工事にあたり、工事車輛用の仮設道路設置予定地を事前調査した。無名の館平場については、宅地になっていたことで、遺構の損傷が考えられ、又、将来盛土により遺構は保護できると判断し、地質の軟弱な堀跡を主体的に調査することにした。(Fig. 2)

2. 昭和63年度事業概要

今年度整備事業は、下記調査要項に則して発掘調査を行った。

昭和63年度史跡浪岡城跡環境整備事業に係る発掘調査要項

1. 調査の目的

国指定史跡浪岡城跡は、中世浪岡北畠氏の居館であり、北日本の中世期を今に伝える城館である。

発掘調査は、この浪岡城跡を史跡公園として環境整備してゆく上で、整備工事に係る

部分について行ってゆくものである。

2. 調査予定期間

昭和63年7月4日から昭和63年10月31日まで

3. 調査対象区域及び調査対象予定面積

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所 地内

予定面積 900㎡

4. 調査員等

調査顧問 村越 潔(弘前大学教育学部教授)

佐々木達夫(金沢大学文学部助教授)

高島 成侑(八戸工業大学助教授)

5. 調査作業員等

調査作業員 石村 栄子、山田むつ子、坪田 京子、秋元 ミサ、鹿戸 京子、
村上 弥生、太田 芳子、工藤 ツル、山田 まき、雪田 悦子、
須藤 輝代、大崎 江、津川 ふさ、東根美津子

調査補助員 林 明子、阿部 雅子、福士 友子、鎌田安差江

6. 調査主体者

浪 岡 町

浪 岡 町 長 阿部 幡彦

7. 調査担当者(事務局)

浪岡町教育委員会

教 育 長 蝦名 俊吉

社会教育課長 加藤 忠弘

社会教育係長 石村 正司

派遣社教主事 佐藤 健

主 査 木村 秀子

主 事 工藤 清泰

主 事 木村 浩一(担当)

8. 調査方法

整備に係る部分のみを調査するものとし、調査終了後は埋め戻し、遺構の保護を図り、
工事を進めるものとする。

9. 報告書の刊行

環境整備事業に係る発掘調査報告書を年度内に刊行する。

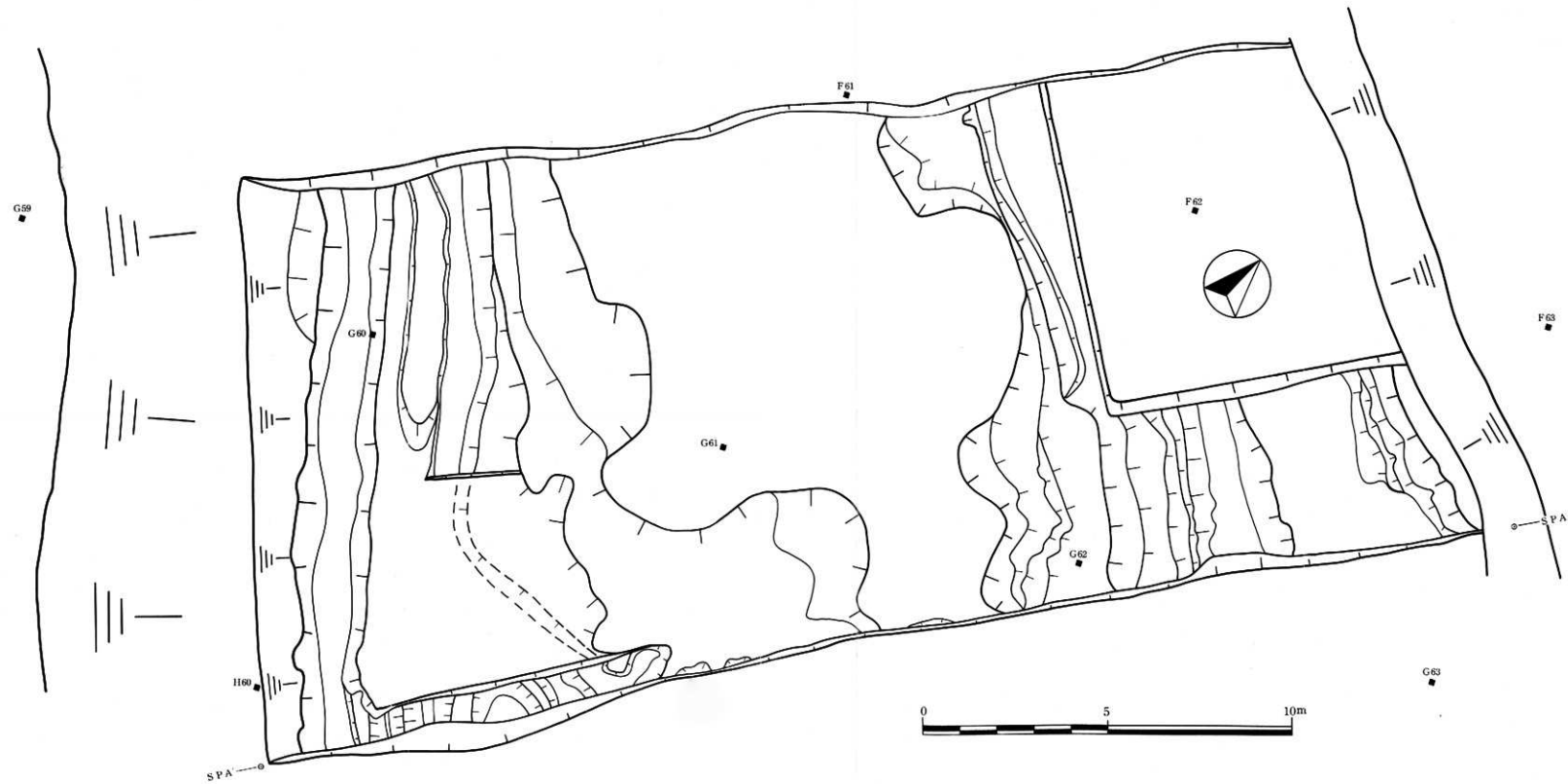
IV 発掘調査について

1. 調査経過（調査日誌より）

- 7月4日 調査対象区域の表土を重機により除去。作業員は、作業器材の点検。補助員は、測量関係器材の用い方等研修。G61・62、F61の各グリッド杭設置。
- 7月5日 B.M.を設置（36.60m）。北館側の堀をSH01、無名の館側の堀をSH02とする。
- 7月12日 F・G63区SH02の表土直下層（第45層）除去。第45層はかなりしまりの強い層であった。
- 7月13日 G63区SH02第47層掘り下げ。唐津皿、褐釉茶入れ、木製品、種子、樹皮等多数出土してくる。SH02の中土墨側は、何度か崩れ、再構築しているらしい。
- 7月18日 SH01セクション面精査、セクション図作成。SH01は湧水著しく作業が困難となっている。
- 7月21日 SH01掘り下げ。セクション図補足。秋田県大館市文化財保護協会、浪岡中学校社会科の先生方見学。
- 7月25日 SH01掘り下げ。SH02の無名の館側にテラス状の平らな部分が見られる。
- 8月1日 SH01掘り下げ。SH02掘り下げ、流木が中央部から中土墨側に集中している。中土墨の再度の構築と流木の集中を見ると、SH02は川状の水の流れが考えられる。
- 8月4日 SH01掘り下げ。堀中央部で地山状の高まりが見られ、SH02同様に東側でテラス様になっている。SH02掘り下げ、午後から浪岡中学校郷土史研究部5名の生徒が発掘調査の体験学習。
- 8月8日 SH02では下駄等木製品が多数出土。SH01は、漆器、陶磁器が出土しているが、数量的には多くない。
- 8月15日 旧の盆にあたるため、出勤者は半数以下。作業もはかどらない。
- 8月17日 SH02掘り下げ、セクション面精査。SH01は湧水量多く、整備工事・活用時の形態が問題となりそうである。
- 8月23日 SH01中央部付近でしがらみ状施設とも思える杭列を検出。この南側で多量の砂が溜っている。流れがあったものであろうか。
- 8月31日 SH02の湧水量が増加、ほとんど流れ込んできている状態。
- 9月9日 SH02掘り下げ終了。SH02は、表土から3m50cm以上の深さになり、二段に分かれて落ち込んでいる。底面近くでは箱堀状の形態を呈している。
- 9月14日 SH02平板により平面実測、レベルング。SH01掘り下げ。
- 9月21日 SH01掘り下げ。南壁セクション沿いを上に掘り下げる。

- 9月27日 SH01掘り下げ。北壁側を先に掘り下げ、水溜めを作る。中里町教育委員会30名見学。
- 9月28日 SH01掘り下げ。山形大学仲野浩教授視察。青森明の星高校130名見学。
- 10月4日 SH01掘り下げ。中土壘側に段を構築している状態が検出されている。堀中の中土壘は当初からのものか。
- 10月11日 SH01掘り下げ。農繁期に入り作業員が半数となる。作業はかどらず。
- 10月19日 SH01中央部の中土壘は、黒色土と灰白色砂質土を混ぜて堅くしているらしい。移植へらもスコップもきかない。しかし、流水により崩れてきてしまう。人為的造作と思われるだけに、城館期には、どのようにして崩れ止めをしていたのだろうか。
- 10月20日 SH01中央部の土壘よりやや下層から数珠出土。銭貨50枚にかかる形で検出される。現状で60個程度確認。
- 10月21日 SH01前日の数珠とほぼ同レベルで、約1m北西側から編み物出土。
- 10月24日 SH01数珠よりやや下、1.5m程度離れて、銭貨4樽出土。
- 10月26日 午前中雨のため遺物洗浄作業を行う。板の頭部に刻みの入った製品がある。もう一片と合わせると幅2/3の塔婆となる。文字痕が浮き上がって見えている。墨痕はみられないが、文字自体は読みとれそうである。残り1/3を探すがなかった。
- 10月27日 SH01掘り上がり。南壁セクション面のみは堀中の土壘も切開して地山まで精査。
- 10月31日 作業員は本日で終了。
- 11月1日～11月15日 調査区を平板に2平面実測。又、室内にて遺物整理作業。
- 11月15日～3月31日 室内にて調査整理作業。報告書作成。

Fig. 3 調查区平面实测图



2. 調査遺構

今年度は、北館と無名の館間の堀跡約430㎡を対象として発掘調査を行った。堀の形態は、発掘調査前には北館側に狹い堀が一本見られ、中央に中土壘、無名の館側（東側）は、さらに高くなり帯郭状に見られた。このため、一つの堀を切る形での調査計画を立てたが、調査が進むに従い、帯郭状に見た部分は、近代以降の埋め戻し盛土によるものであることが判明した。

結果、堀は中央に中土壘を挟み、北館側と無名の館側に2本の堀が検出されたことになる。なお、北館側の堀をSH01、無名の館側の堀をSH02、中土壘をSA01として以下報告してゆく。

(1) SH01

SH01は、堀幅が北壁側で約7m、南壁側で約11m。深さ2.6m程度の規模を有する。北館側斜面から急角度で落ち込み、南壁側では堀底幅約5mを経て中土壘へとゆるやかに立ち上がる。一方、北壁側では、北館側からも中土壘側からも急角度で落ち込み、堀底幅は約2.5mで、形態的には薬研堀の変形となる。

中土壘から堀へ落ち込んだ部分に段が再構築され、中土壘が拡張された形となっている。この構築された部分は、セクション図の第20層以下の層で、表面は黒色土と灰白色砂質土の混ざり合った土を固めて用いている。第20層の西端は、厚板を杭状に立て、土留めとして使用している（以後SA02と表記する）。以下、各層序ごとに主な出土遺物と時期について述べてゆく。

第1層～第3層（PL.5）

青磁稜花皿、新磁器皿、染付ヒダ皿、桶底片出土。第1層・第2層は、近世～現代までの耕作土と思われる。第3層は中土壘側からの流れ込み土か。

第4層～第5層

出土遺物なし。中土壘の延長となる段を形成していたものか又は、近世水田耕作時の畦畔として用いた可能性もある。

第6層～第8層

出土遺物なし。層序からは、城館期と近世以後の耕作土との境界になる。北館斜面からの崩落土と思われる。

第9層～第10層（PL.5,6）

染付皿、瀬戸鉄軸皿、埴塀、羽口（以上第9層）、青磁碗、染付皿、美濃鉄軸碗、美濃灰軸皿、瓦質土器、唐津鉢、越前糸織鉢、産地不明瓦質土、溶解物、桶底、漆器、梳櫛、蓋状木製品（以上第10層）が出土している。唐津鉢と思われる遺物の出土や、層序から見て、城館期末の16世紀末と思われる。SH01は全体的に遺物が少ないが、

この層は泥炭状に植物遺存体が残りに、それに伴い木製品や流木、漆器の出土が多かった。第20層以下(SA02)の直上に堆積していることから、滅館期末にはSA02は機能しなくなり、堀は幅が広く、比高差の小さな状況が想像される。第9層部分は低く水が流れていた可能性も考えられる。

第11層

桶底出土。北館斜面、地山からの崩落土か。

第12層(PL.6)

青磁皿、染付皿、美濃灰釉皿、産地不明掻鉢、漆器、下駄、陽物形木製品、が出土している。16世紀中頃の層と思われる。

第13層

出土遺物なし。SA02の直上に形成された層であり、SA02の崩壊により、補修が必要となったであろうことが想像される。

第14層～第15層(PL.7)

白磁皿、染付皿、中国?褐釉碗、下駄、漆器、木製へら、刃物の柄、数珠、塔婆が出土している。塔婆について詳細は後述するが、SA02の土留めとして用いられた可能性が高く、第14層下面に倒れた状態で、頭頂部の尖った方をSA02へ向け折り重なるように出土している。16世紀前半の層と思われる。

第16層(PL.7)

越前甕、桶底、銭貨が出土している。銭貨は繻状で16層上面の北館直下から出土している。SA02が存在した時期の堆積土と推定される。16世紀前半の層と思われる。

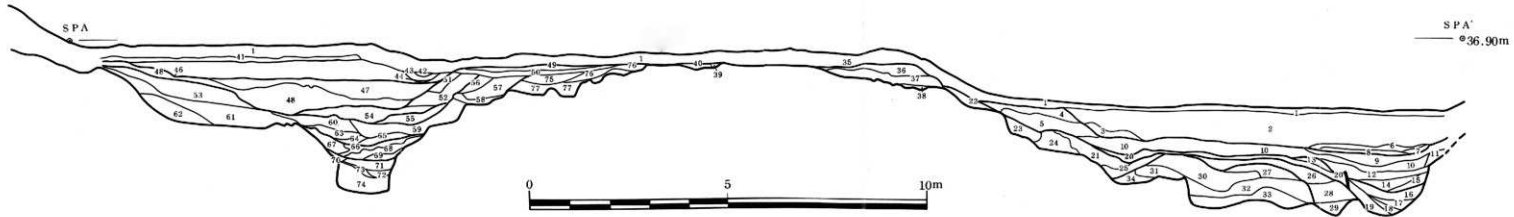
第17層～第19層(PL.8)

堀底部分から青磁碗が1点出土している。遺物の出土は少ない。堀底はU字状を呈している。

第20層～第21層

第20層から染付皿片が出土している。SA02は幾度か作り直されているが、最も顕著に構築されている時期である。黒色土に灰白色砂質土(地山)の大粒状に砕いたものを混入し、固めている。西側(北館寄)には板杭により土留めを行い崩壊を防止している。杭は50cm～1m間隔で打たれている。一見して、固さ、地山土の混入具合から地山の掘り残しによる中土層からの延長の段と思われたが、調査を進めてゆくにつれ構築後に造作したものであることが判明した。出土遺物及び第12層～第19層との関係から16世紀前半の層と思われる。

Fig. 4 調査区南壁セクション図



Ch. 調査区土層記表

層序No	特徴
1	黒褐色土(0YR3/2)に、細小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%含まれる。
2	暗褐色土(7.5YR3/4)に、粗粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%、灰白色(10YR7/0)の細小粒が9%含まれる。
3	暗褐色土(7.5YR3/4)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%、細小粒の砂が2%含まれる。
4	灰褐色土(10YR5/2)に、灰色砂(10YR3/0)の塊が若干の割合で含まれる。
5	暗褐色土(0YR2/2)に、細小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%、暗褐色砂質土(7.5YR3/0)が1%含まれる。
6	黒色土(0YR2/0)に、褐色土(7.5YR4/0)の細小粒が1%含まれる。
7	暗褐色土(7.5YR3/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。
8	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%、粗粒が4%、灰褐色砂質土(7.5YR3/0)の塊が1%含まれる。
9	暗褐色土(7.5YR3/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が5%含まれる。

層序No	特徴
10	黒色土(7.5YR2/0)に、細小粒の褐色(1)土、褐色砂質土(7.5YR6/8)と灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。上部層で暗褐色砂質土が9%。
11	灰白色(10YR7/0)に、暗褐色土(7.5YR3/4)の塊が5%含まれる。
12	暗褐色土(7.5YR3/2)に、灰白色(10YR7/0)の細小粒が3%、褐色砂質土(7.5YR6/8)の細小粒が1%含まれる。
13	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の細小粒が1%、褐色砂質土(7.5YR6/8)の細小粒が1%含まれる。
14	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の細小粒が1%含まれる。粗粒、塊状物以上あり。
15	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。
16	暗褐色土(7.5YR3/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%、暗褐色砂質土(7.5YR3/0)が1%含まれる。粗粒、塊状物あり。
17	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の細小粒が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。

層序No	特徴
18	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
19	暗褐色土(7.5YR3/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。
20	暗褐色土(7.5YR3/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。
21	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。
22	暗褐色土(7.5YR3/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%含まれる。粗粒が若干ある。
23	暗褐色土(7.5YR3/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%、暗褐色砂質土(7.5YR3/0)が1%含まれる。粗粒、塊状物あり。
24	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が5%含まれる。

層序No	特徴
25	暗褐色土(7.5YR3/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が5%含まれる。
26	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。
27	暗褐色土(7.5YR3/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。
28	暗褐色土(7.5YR3/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。粗粒、塊状物あり。
29	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。
30	暗褐色土(0YR2/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。
31	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%含まれる。
32	暗褐色土(7.5YR3/2)に、灰白色(10YR7/0)の塊が若干の割合で含まれる。暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。

層序No	特徴
33	灰白色(10YR7/0)と、黒色土(0YR2/0)との6:4の塊層。粗粒が若干ある。粗粒、塊状物あり。
34	灰白色(10YR7/0)と、黒色土(0YR2/0)との5:5の塊層。粗粒が若干ある。
35	暗褐色土(7.5YR4/0)に、細小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。粗粒、塊状物あり。
36	暗褐色土(7.5YR4/0)に、2mm-5mm程度の石が20%含まれる。
37	暗褐色土(0YR2/2)に、2mm-5mm程度の石が20%含まれる。
38	暗褐色土(7.5YR3/2)に、暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%、褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。
39	暗褐色土(0YR2/2)に、褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が3%含まれる。
40	暗褐色土(0YR2/2)に、暗褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が5%、小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。
41	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が5%含まれる。

層序No	特徴
42	粗小粒の砂による層序
43	暗褐色土(7.5YR3/2)に、中粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が2%含まれる。
44	暗褐色土(0YR2/2)に、中粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
45	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
46	粗小粒の砂による層序
47	暗褐色土(0YR2/2)に、中粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
48	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
49	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
50	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
51	暗褐色土(7.5YR3/2)に、暗褐色土(0YR2/2)の塊が1%、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)の塊が1%含まれる。

層序No	特徴
52	暗褐色土(7.5YR3/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%含まれる。
53	暗褐色土(0YR2/2)の層序
54	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
55	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
56	暗褐色土(0YR2/2)に、中粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
57	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
58	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
59	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
60	暗褐色土(0YR2/2)の層序
61	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%、粗小粒の褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。

層序No	特徴
62	暗褐色土(7.5YR3/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%含まれる。
63	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%含まれる。
64	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
65	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
66	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
67	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
68	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
69	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
70	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。

層序No	特徴
71	粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%含まれる。
72	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が5%含まれる。
73	暗褐色土(7.5YR3/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
74	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
75	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
76	暗褐色土(0YR2/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
77	暗褐色土(7.5YR3/2)に、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%、粗小粒の暗褐色砂質土(7.5YR6/8)が1%含まれる。
78	粗粒、暗褐色砂質土(0YR2/0)

第22層～第24層

中土塁から堀へと傾斜する部分で流水等により削られ穴のあいた部分を充填している土層である。出土遺物は特になく、固くしまっている。

第25層～第29層

第26層から漆器碗が出土している。SA02として構築されているが、北館側端で地山の盛り上がりがあり、堀構築当初から段を形成していた可能性も高い。地山上は、水に弱く、少量の雨でも吸水し崩壊してゆくため、堀として機能していた時期にSA02は崩壊し、その後、堀自体に流れがあったことも考えられ、幾度も補修したものと思われる。第29層は砂層で、湧水が著しい。

第30層～第34層

漆器碗出土。第33・34層は砂層で湧水が著しい。第31層は地上ブロックでSA02の基盤となっている。

(2) SA01

SA01は、幅約11m（南壁側で）あり、地山の崩壊に伴い、何度か縁辺を補修している。また、土塁上部は、後世の耕作により削平され、平坦な畑地として用いられてきた。表土は約30cmの厚さで地山にかかり、出土遺物、明確な検出遺物はほとんど見られなかった。

以下、SH01同様に層序ごとに記載してゆく。

第35層～第38層

SA01の西端部にあたり、第36・37層は褐色土、砂、小礫が混在し固くしまっていた。

SA01の補修として城館期の16世紀代に構築されたものと思われ、後世の畑・水田耕作時には畦畔として使用されたものと思われ、他部分と比較すると削平がやや少ない。

第39層～第40層

第38層と同様に、SA01の補修（穴うめ）と思われる。柱穴とも見えるが不明。

(3) SH02

SH02は、無名の館—中土塁間の堀跡で、掘り方の幅は約9mと思われるが、その1/2は、無名の館から落ち込んだ部分に段を形成する。SH02の最深部は、中土塁から落ち込んだ部分にあり、その断面形は、底部が箱型形、途中から傾斜がつき薬研型となる。これは、築城期からの形態であるのか、流水により掘底が削られ、形態が変化したものか不明である。

また、SH02の上部の層は近代以降の盛土と前述したが、遺物・セクションからだけではなく明治初年の分限図にも水田の表示があり、堀の延長であったことが推定された。しかし、明

治初年における水田の耕作面は第何層にあたるものか不明である。

セクション図からは、SH02は何度かSA01を補修し、中土塁からの斜面を形成している。この斜面の形成が、中土塁の1/3まで入り込んできており、早い時期から崩壊が進んでいたものか、通路等として、使用が頻繁であったものか不明な点が残る。以下、各層序ごとに主な出土遺物、時期について述べてゆく。

第41層 (PL. 8)

唐津皿、越前甕、不明陶磁器、新磁器が出土している。耕作のための客土と思われる。

第42層～第44層

第41層又は第45層耕作時に使用した用水堰跡と思われる。出土遺物特になし。細砂が多量に含まれている。

第45層～第46層 (PL. 9)

青磁皿、白磁皿、染付皿、中国?鉄粒茶入れ、唐津皿・鉢、瀬戸灰釉折縁皿、珠洲鉢、産地不明陶器、新磁器が出土している。城館期以後の埋め戻し土と思われる。しかし、出土遺物中には、城館期末と思われる遺物も含まれていることから、無名の館平場などを削平し、盛土としたことも考えられる。なお、第46層は、細砂によるブロック状の間層である。

第47層～第48層 (PL. 9, 10)

染付皿、白磁皿、美濃・瀬戸灰釉皿・折縁皿、唐津皿、不明陶器 (以上第47層出土) 青磁皿、染付碗・皿、美濃・瀬戸灰釉皿・折縁皿、美濃褐釉碗、唐津皿、越前甕、漆器碗、付札状木製品、下駄、桶底、刃物の柄、小円盤形木製品、陽物形木製品、(第48層)が出土している。出土遺物からは城館期末の16世紀末期に相当すると思われる。SH01と同様に、東側に作られている段が、この時期には機能しなくなっており、幅広く比高差の少ない堀が存在したと思われる。第47層から徐々に湿性が強くなり、有機物の遺物が出土しはじめるが、本格的に製品が出土してくるのは第48層に入ってからである。ただし、唐津皿や、美濃・瀬戸灰釉皿の同一個体が両層から出土しているため、絶対的な時間差はあまりなかったことも考えられる。

第49層～第52層

第52層から下駄が出土しているが、他に目立った遺物はない。第49層の上層は、後世の耕作によると思われる削平により薄く平坦になっていると思われる。第49層・第50層ともに地山土と褐色土を混合し、固めて版築状に中土塁上面を形成していったものと思われる。第51層・第52層も、地山土を中心に褐色土や砂等を用い、中土塁の壁を構築しているが、当初の掘割りよりも中土塁が広がり、掘幅は狭くなっている。堀と

しての役目よりも中土塁の用途が広がってきたが、水の流れ等による崩壊を計算に入れて大き目に中土塁を構築したものが不明な点が多い。

第53層～第55層 (PL. 10)

染付皿、下駄、取手、漆器、刃物の柄、穴明き石（以上第54層）、瀬戸灰釉皿、漆器（以上第55層）が出土している。16世紀前半～中頃の層と思われる。

第56層～第58層

第57層から染付が出土している。第51・52層と同様に中土塁を補修したものと思われる。16世紀前半の層と思われる。

第59層

染付皿、下駄、取手、刃物の柄、桶底が出土している。16世紀前半の層と思われる。

第60層～第65層

第60層～第63層までは、無名の館側からの落ち込み土と思われる。また第61・62層はさらに早い時期、堀構築時すぐに崩落・埋まった部分かもしれない。第64・65層の上面は、第59層形成前に波深されている可能性が高い。

第66層～第69層

目立った出土遺物なし。時期も特定できない。

第70層～第74層

堀構築時から堆積してきた層。第74層は砂が主となり、湧水が著しい。層序の堆積状態からは、第70層～第74層まででも幾度かの波深がなされたと思える。

第75層～第77層

中土塁の補修・復元の第一段階である。中土塁上部が初期から崩壊したのであろうか。それとも、SH02をさらに幅広い堀とする予定を変更して、中土塁を完成させたのか、工事用の段として利用した部分を、堀完成と同時に中土塁として整備したものか、様々な要因が考えられるが不明な点が多い。

以上、SH01・02、SA01(02)の概要を記した。SH01・02については、東側に段を有してから最深部に落ち込み急角度で立ち上ってゆく形態がみられた。これは、北館を重要視した防御施設としての性格がみられるものである。この形態が、堀構築時又は早い時期から見られ、16世紀前半までは、補修・波深を繰返しながら形態を保っていたと推定される。しかし、城館期末にはこの形態も崩れ、SH01・02ともに幅広く平坦で浅い堀へと変化してしまう。

また、出土遺物数は出土状況からみると、SH01では16世紀前半の層からの出土遺物が多いのに対して、SH02では16世紀末の層から多量の陶磁器、木製品等が出土している。以下、堀

の形態変化と遺物出土状況から考察すると、

- ①. 堀構築時から16世紀前半までは、堀の防御性を重視し、北館側（城館内部）を中心とした生活が考えられる。出土遺物が少ないのは、度重なる浸漬のためか又は経済活動がまだ安定しなく、城館主中心の生活が考えられるところである。
 - ②. 16世紀前半（中頃まで）には、北館での生活が盛んになり、堀は防御としての機能は残すが、生活重視となってゆくものと思われる。
 - ③. 16世紀末には、堀の防御施設としての機能が薄れ、浅い平坦な二重堀へと変化してゆく。同時に北館よりも無名の館側の人口・生活が活発になってゆくものと思われる。
- これら①～③は、北館の時期別遺構配置推定と合致する部分が多い。なお、中土壘については各時期ごとに、又は全時期を通した利用、（通路等としての使用）が考えられるが、近世以後の耕作に際し削平されてしまっているため、確認できない状況である。

3. 出土遺物

出土遺物は、陶磁器約150点、鉄・銅製品10点、銭貨782点、石製品5点、木製品760点、牛骨30点、植物性遺物約150点が出土している。以下、概要を述べてゆく。

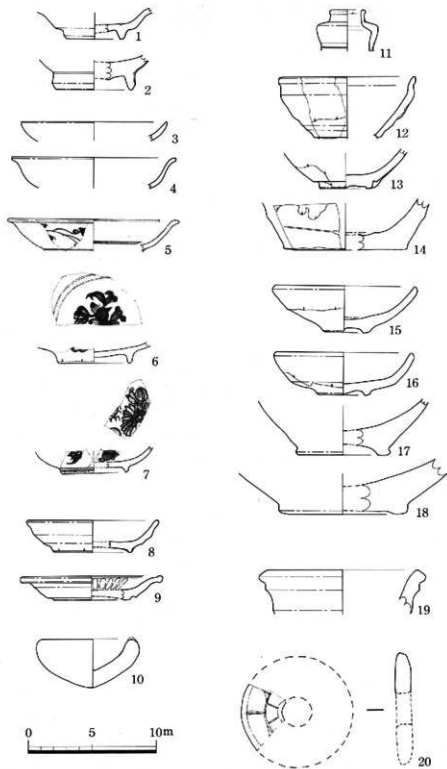
(1) 陶磁器 (Fig. 5)

陶磁器は大別すると、舶載陶磁器と国産陶磁器となる。また、城館期以後の新しい磁器も出土している。

a. 青磁 (Fig. 5-1・2)

青磁は8点出土している。内訳は碗3片、皿5片である。碗3片と皿2片はSH01からの出土である。碗は底部2片と胴部1片で、底部のうち1片は灰白色で緻密な胎土に透明感のある青緑色釉がかかるもので、露胎部は黒色となる。高台の一部のみ出土している。底部片もう一片 (Fig. 5-2) は、暗灰色で緻密な胎土に青緑色の釉がかかる。胴部には便化蓮弁文があるようだが、明確には見えない。胴部片 (PL. 8-上) はSH01の堀底から出土したもので暗灰色堅緻な胎土に黄緑色釉がかかり、外面には蓮弁文、内面には割線文がみられる。皿は、いわゆる鍍花皿が主となる。底部片は2点あり、胎土は2点とも灰色堅緻なもので、見込み釉ハギとなる。1点は透明感のある青緑色釉がかかり、露胎部は黒色を呈する。もう1点 (Fig. 5-1) は、不透明で黄色がかかった青緑色釉がかかり、露胎部は黒色、見込には割線とスタンブ文らしい痕跡が残る。なお、胎土には若干の白色粒が混ざるようである。残り3片は、皿胴部又は口縁部までの小片で、1点は灰白色の胎土に不透明な青緑色釉のかかったもの、1点は、

Fig. 5 出土陶磁器实测图



、明灰色の胎土に透明感のある青緑色釉がかかり、内面に劃線による文様の見られるもの、もう一点は暗灰色の胎土に不透明な青緑色釉がかかるものである。

b. 白磁 (Fig. 5-3・4)

白磁は9点出土している。形態的には、口縁が内湾するもの3点(うち2点はSH02出土)と口縁が外反するもの4点(うち3点はSH01出土)、胴部片2点からなる。口縁が内湾する皿 (Fig. 5-3) は、3点とも灰白色で硬質な胎土に透明感のある白色釉がかかる。口縁外反するいわゆる端反りの皿のうち、SH01から出土した3点は (Fig. 5-4) 灰白色硬質の胎土に透明感の低い白色釉がかかる。SH02から出土した1点は灰白色軟質な胎土に明灰色の透明釉がかかるものである。胴部片2点は、灰白色硬質な胎土に白色と青白色の透明釉がかかるもので、内湾する皿のものと思われる。

c. 染付 (Fig. 5-5・6・7)

染付は37片出土しているが、近・現代の磁器も含まれている。これらについては、ここでは述べない。器種は碗と皿になり、皿は口縁内湾するものと端反りになるものがある。また、ヒダ皿状形態のものがあるが、第2層からの出土であるため、城館期後の遺物の可能性もある。

碗は、口縁部及び胴部片で、口縁は内湾するが、全体形は不明である。皿は内湾するものと端反りになるものがある。内湾するものは、口縁部のみで、文様構成はみられない。なお、1点だけ胎土が褐色軟質なものがある。端反りのもの (Fig. 5-5) は外面口縁部に界線、胴部に唐草文が描かれ、内面は口縁部に一条の界線が巡る。底部片には、玉取り獅子文と思われるものと、花卉文 (Fig. 5-6) が施されるもの、また、明代の染付と思われるもの (Fig. 5-7) が出土している。城館期末から近世にかけての面では、伊万甲と思われる皿の破片も出土している。

d. 中国褐釉 (Fig. 5-11)

中国褐釉の可能性のある肩衝茶入れ (Fig. 5-11)、鉄釉のいわゆる犬目碗口縁部が出土している。

e. 美濃・瀬戸灰釉 (Fig. 5-8・9)

皿、鉢28点がみられる。鉢と思われるものは、内部に隆起が斜行し、スタンプ文状の痕跡が残るもので、全体形等は不明である。皿は大別すると4種に分けられる。口縁が内湾するもの、端反りになるか又はやや外反するもの、ヒダ皿になるもの、折縁皿である。内湾するものは、器厚が概して厚手で、外反するもの (Fig. 5-8) は概して薄手成形されている。ヒダ皿は、二次焼成を受けたように器面が荒れ、一部黒色を呈している。折縁皿 (Fig. 5-9) は、成形・焼成とも不良である。同個体の底部と思われるものは、見込み釉ハギで、見込及び底面に輪ドチ痕が残っている。釉は黄色が強くてきている。

f. 美濃・瀬戸鉄釉 (Fig. 5—12・13・14)

碗・皿・壺の5点が出土している。鉄釉のいわゆる天目碗は3点出土し、黒色を呈する底部 (Fig. 5—13) と、茶褐色で口縁部がくびれ、玉縁状に段がつくもの (Fig. 5—12)、茶褐色で、口縁部がくびれてから外反するもの3点がみられる。皿は鉄釉が全面にかかり、黒色を呈し、高台は葎筒状になり見込・底裏にトチ痕が残るものである。壺 (Fig. 5—14) は、鉄釉が一部にかかる底部片で、内面には自然釉がまばらにかかっている。

g. 唐津 (Fig. 5—15・16・17・18)

唐津は28点出土しており、鉢の2点を除くとすべて皿の破片である。鉢はともに赤褐色の胎土に灰緑色の不透明釉がかかるもので、小ぶりのもの (Fig. 5—17) と大ぶりのもの (Fig. 5—18) である。皿は、胎土やや赤褐色軟質で不透明な青灰色釉のかかるもの (Fig. 5—15・16) と、胎土暗灰色硬質で灰緑色透明な灰釉のかかるタイプの2種類がある。後者にはトチ痕が残る、いわゆる胎土目である。数量的には、前者の方が後者の1.5倍程度出土している。

また、後者の中を含めたが、胎土灰色硬質で緑色透明な灰釉のかかる一群がある。これは、胎土中に白色粒が多量に含まれ、口縁形も他の唐津皿とは異なるため、朝鮮等の可能性も考えられるものである。

h. 越前 (Fig. 5—19)

越前は壺が5点出土している。口縁部 (Fig. 5—19) は外面黒色で光沢があり、口唇部及び内面には自然釉がかかる。同一個体と思われる胴部が1片ある。他は壺の胴部で長石粒が若干吹き出している。また、越前系と思われる播鉢も1片出土している。

i. 珠洲

珠洲と思われるものは6片出土している。鉢は底部と口縁部が各1片、他はすべて壺の胴部である。しかし、胎土にばらつきが見られ、すべてが珠洲であるとは言いがたい。

j. 瓦質土器

瓦質土器は4点出土している。1点は鉢の口縁部で、内外面ともに黒色で表面直下が灰色の薄い層を形成する。他の3点は火鉢等の破片と思われる。うち1点は平坦で内外面とも黒色であり片面には細砂と炭化物が焼きついている。一断面には黒色の漆により接合した痕跡が残る。2点は、外面明灰黄色一部黒色で、対土赤褐色の同一個体と思われる。

k. 埴塙・羽口 (Fig. 5—10, PL. 11)

埴塙は2点、うち1点は完形で (Fig. 5—10) 両方とも銅滓が付着しており、鑄造に用いられたと思われる。羽口は3点出土している。

l. その他 (Fig. 5—20)

産地不詳の播鉢が3点出土している。2点は、胎土・内外面ともに黒色で軟質な印象のある

ものである。1点は胎土褐色、内外面は褐灰色になり、櫛目は越前の技法に近いものである。

他に土製品として、土垂とドーナツ状の土製品 (Fig. 5—20) がある。ドーナツ状の土製品は、軽く、車輪状の文様が片面に施されるもので、用途は不明である。

(2) 鉄・銅製品

鉄・銅製品は、鉄製品8点、銅製品2点の計10点が出土したのみである。鉄製品のうち、近・現代の遺物である、棒状鉄製品・蹄鉄を除くと、城館期の遺物は6点となる。この中には、刃物の茎球の遺物や鉄滓もあるが、大部分は用途・形態ともに不明である。銅製品は、小柄の柄と用途不明銅製品が出土している。小柄の柄は、表面が金色に輝いており、箔が施されているものと思われる。箔のみられない部分は赤褐色を呈している。刃の部分は欠損しているが、茎はまだ柄の中に残っている。今年度調査箇所は金属器の出土が少なかった。

(3) 石製品 (PL. 11)

石製品は、石鉢・砥石・穴明き石・石臼の4点が出土している。石鉢と思われるものは6cm×7cm程度の小片で一面が研磨されている。砥石は加工時の工具痕が残っている。大きさは、4.5cm角で割れているため長さは不明である。中央部は何度か使用した痕跡がみられる。穴明き石は、直径4cm厚さ1.2cmに白色凝灰石を加工し、中心に1.8cmの穴を明け、表面には放射状に3本の刻線を入れ、裏面には、塊から切り離した痕が残っている。民俗風習で残っている寺社への賽銭代わりの穴明き石と思われる。石臼は粉挽き臼の上臼で、目の数・方向・区画数などは不明である。

(4) 木製品 (Fig. 6・7, PL. 12・13・14・15)

木製品は、用途が不明な遺物を含めると760点、加工痕があるものを加えると1,000点を越す出土があった。ここでは、用途の明確なもの、又は用途の推定できるものについて述べてゆくものとする。

a. 下駄 (PL. 12)

下駄は15点、すべて片方だけの出土である。内訳は、連歯型のもものが11点、差歯型のもものが1点、歯のみられないものが3点ある。

a-1. 連歯型下駄 (PL. 12—21・22・23・24・26・27)

最も多い型で、大人用と思われるものと、子供用と思われるものの2種がある。大人用と思われるのは9点で、広葉樹を用いたと思われ腐蝕の著しいものが4点あるが、他の5点は保存状態が良好である。この9点のサイズを比較してみる。長さは17.1cm～24.3cmまでで、平均値

は20.6cm、幅は8.2cm～13.5cmまでで平均値は9.88cm、高さ(厚さ)は歯の欠けた状態の2.1cm～7.0cmまでで平均値は4.04cm(なお、歯の残るものみでの平均値は約4.6cm)となり、PL. 12-23が最も一般的なサイズとなろう。形態的には隅丸長方形のものが一般的である。PL. 12-21は厚板を加工したものらしく、歯は痕跡が残るのみで、鼻緒穴は四角に切られている。一見して素人の作と思われるものである。PL. 12-22は下駄底裏に鼻緒の結び目が残るもので、緒は、藁縄状のものを使用していたらしい。PL. 12-24は、かかと部分に十字の刻みがあり中央部が焼けている。歯は下部に向かって広がるいわゆる銀杏歯と呼ばれる形態である。

また、子供用と思われるもので、PL. 12-26は、長さ16.2cm、幅7.4cm、高さ3.0cmで、形態は平面が長楕円形で面取りしており、上面には刻線により文様が描かれているが、使用時に磨り減って中央部は消えてしまっている。作成は丁寧で、裏側鼻緒の結び目にあたる部分も手を加え、結び目が邪魔にならない様にしている。PL. 12-27は形態、特に歯はしっかりしていないが、大きさはさらに小さく、長さ12.2cm、幅7.1cm、高さ1.4cmと幼児のサイズである。

a-2. 差歯型下駄 (PL. 12-25)

差歯型下駄は1点のみで、長さ22.0cm、幅9.8cm、高さ2.5cmで歯は残っていない。形態的には、平面楕円形、下面は斜めに面取りがなされ舟形を呈する。いわゆる露卯下駄となっている。

a-3. 歯をつけていないもの (PL. 12-28・29・30)

歯をつけていないものは3点である。PL. 12-28は、長さ25.3cm、幅13.7cm、厚さ2.1cmと出土下駄中最も大きく、裏面は鼻緒の結び目が収まるよう円形に浅く削ってある。田下駄として用いるには小さくまた、鼻緒の位置が他と同様であることから、板金剛的な特別な用途を考えた方がよいのであろうか。PL. 12-29は底面が平坦であるが先端のみ段がついて薄くなっている。これも前記の下駄と同様に考えた方がよいのであろうか。PL. 12-30は、鼻緒穴の他に四隅に穴があり、木釘が打ってある。木製行火等の部材の転用と思われる。

b. 取手 (PL. 13-31・32)

取手は3点出土している。2つのタイプがみられ、1つは、握り部分のアーチが大きく、角ばった印象を与えるもの(PL. 13-31)で、これが2点出土している。図版のものは、側面にV字状の刻みが表裏同一箇所にみられている。もう1つのタイプはアーチの立ち上がりが低く直線的な印象を与えるもの(PL. 13-32)で、図版のものは、片側の結び突起部分が欠損したため、穴をあけ、使用していたと思われるものである。これら2タイプの取手の形態が異なるのは、用途の相違か、異なった文化圏の人・物が同時に入り込んでいたのか疑問点が残る。なお、出土層序は両者とも第59層である。

e. 付札状木製品 (PL. 13—37・38・39・40・41)

付札状木製品は5点出土している。形態的には斎申状とした方が適当かもしれない。形態は上部が平らになり、上部側面にV字状の切れ込みが相対して入り、下部は削られ、細く尖っている。大きさは1点を除き長さ11.0～12.8cm、幅3.0～3.3cm、厚さ0.2～0.4cmとなる。これらと異なるもの(PL. 13—37)は、長さ20.8cm、幅3.7cm、厚さ0.8cmといずれも大きくなり、また、整形も他のものに比較して雑であり、この1点のみ板目材の加工品となる。PL. 13—41は上部にV字状の切れ込みが入り、形態が他のものと異なる。大型のもの1点を除き、厚さと材質からは、柾板と同様のものを加工したと思われる。また、先端の折れているものが3点みられることから、刺して用いたものと思われる。5点とも文字の痕跡は見られない。

f. 漆器

16点出土している。漆被膜のみの出土が3点、また、細片での出土が多い。細片での出土は、内・外面に朱漆又は黒漆の1種類で塗ってあるものが多く、内面朱漆、外面黒漆を施したものの中には、形態が残り、文様が施されるものが見られる。文様は、外面の黒漆部分に朱漆で、鶴丸文様が三角形に3つ配され、それが1つのパターンとなり器の反対側にもう1パターンが描かれているものが、完形品1点、破片2点出土しており、規格品があったかと思わせる。また、同様に朱漆で○に笹あるいは竹の文様と、梵字状の文様が交互に四面に描かれているものである。これは、木地の腐蝕が著しいため、完形分の資料が出土しているが採寸が難しい。

g. 柄・柄状木製品 (PL. 13—48)

刃物等の柄と思われる遺物で8点が出土している。ほぼ完形の1点(PL. 13—48)は目釘穴はみられず、たが等の固定痕が柄に残る。他、同様のもので1/2に割れており、内部に茎の痕が残るもの、目釘穴2箇所とたが痕が残るもの、1/4程度に割られているが目釘穴1箇所とたが痕が残るもの等がある。また、これらとは別に、把手状の木製品がある。長方形の木製品の三辺に木釘を9本打っており、火打ち金や予引き金を挟み、固定したものと思われる。

h. 筥 (PL. 13—34)

筥は2点出土している。図版のものは、柄は羽子板状になり、全体は長く先端は薄く削られている。先端の一部は炭化している。

i. 小円盤形木製品 (PL. 13—42・43・44・45・46・47)

すべて碁石大の薄い木製品である。全6点の出土は第48層からで、城館期末の製品と推定される。形態的には、削りの痕が残り、楕円状になるなど整形が不十分である。玩具として用いた可能性が高いと思われる。

j. 櫛 (PL. 13—49)

櫛は1点のみ出土している。長さ・幅とも折れているため明確ではない。厚さは1.1cm。目

が細かく梳櫛と思われる。樹種不明で、表面に漆等を塗っていた可能性も考えられる。

k. 鬮物型木製品

3点出土している。長さは18~19cm程度で直径3~4cmの木の一端を削り、こけし状に加工している。3点とも本体には樹皮が残り、頭部をひと回り小さく、荒く削り出している。1点については、頭部に縦に刻みを入れることで、上から見ると梅花状になっている。用途としては、民間信仰に関係した金檜様や山の神の変形であることも考えられる。

l. 桶底

16点出土しているが、1/3程度残存しているものが最も多い。厚さは0.6~2.0cmまでと多様であるが、最も多いのは1.3cm前後となる。直径についてはまだ算出していない。

m. その他

蓋状木製品は、直径6.0cm、高さ1.9cmで、上部が半球状、下部が円筒状となっている。全体の1/2は炭化している。PL. 13-36は、箸状であるが、一方の端を鋭く削り、もう一方の端には穴があいていたものと思われ、削の補修・編物の縫製等目の荒いものの製作用の木製針と考えられるものである。PL. 13-35は、農具と思われる。近年まで用いられた、苗代の整地時に用いた「ナワシロカキ」と同一のものと思われる。熊手型に、本体に直角に柄がつけられ、四本の歯がでている（四本のうち、二本は当初のもので、一本は補充、一本は欠損し穴のみが残っている）。また、直径8~9cmの小さな桶底状で、中心に穴があき、ドーナツ状の形態を呈した木製品もあるが、用途は不明である。なお、塔婆・数珠については別項をもうけ、後述する。

(5). その他の遺物について (PL. 13-33, 14)

ここでは、主に木製品を除く植物遺存体と獣骨を中心に述べてゆく。植物遺存体には種子等の自然物に由来するものと、人為的な加工品とに分けられる。種子 (PL. 14-下) は、くるみと桃が大部分を占める。くるみには、一部、主に先端が炭化しているものが1/3弱みられる。栗等と同様に焼いて食したものであろうか。また、二面に穴のあいているものや、上下に1/2にしたものもみられる。小動物の食痕であろうか。桃核は半載したものが出土数の半数以上を占め周辺が欠けているものも見られることから、仁を採るために割ったものとも考えられる。

人為的な加工品では、麻等の紐を編んだ編物 (PL. 13-33) がみられる。現在の鹿子編に似た状態で、長さ30.0cm、幅8.0cm、厚さ0.5cmが出土した。この他1/2を纏ってある縄も出土している。骨は獣骨が主であるが、人骨と思われる頭頂部も出土している。ただし、脆弱化しており、取り上げ不可能な状態であった。

(b). 銭貨

銭貨は782枚出土している。うち、691枚は繻状に一括で、69枚は数珠に共伴しての出土である。782枚の内訳は別表(Ch. 2)のとおりであるが、開元通宝から洪徳通宝までが出土しており、北宋銭が種・量ともに多くなっている。銭貨の中には私鑄銭と思われる質の悪いものや、無文銭、座金状の鋳銭も多数混入している。また、金・安南銭も1枚ずつながら含まれている。繻状で出土した銭貨と、数珠に伴出した銭貨について以下詳細を述べてゆく。

a. 繻状で出土した銭貨 (Fig. 6)

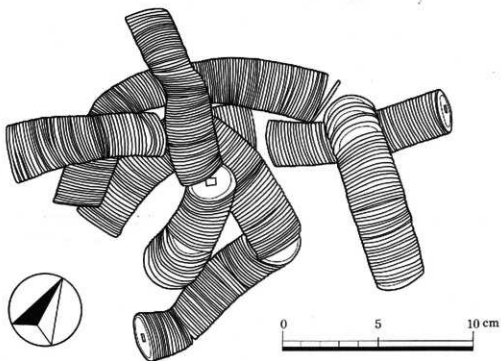
銭貨はSH01の16世紀前半の層、第16層上面で検出した。検出時には、4摺・400枚前後と、従来の出土例から推定し、取り上げた。中を通っていた紐は薬が燃らずに1本通っていたのみで、持ち運び等はほぼ不可能と思われた。取り上げ後整理作業を進めると、各々139枚・205枚・207枚・140枚となった(別表Ch. 3参照)これは、後述する数珠に伴出した銭貨69枚の約2倍・3倍となっている。また、図で見られるように銭貨一摺がいくつか区切られている。No.1については、何枚目で切られていたのか確認しなかったが、No.2については、No.2-1が1-69枚目まで、No.2-2が70-138枚目まで、No.2-3が139-205枚目までとなっている。No.3は、大きく2つに分かれており、No.3-1は1-139枚目まで、No.3-2が140-207枚目までとなっている。No.4については70枚ずつの2本に分かれている。以上のように、69枚という数

Ch. 2

銭貨名	初 鑄 年	枚 数	出土率(%)
開元通宝	唐 621	32	4.09
乾元重宝	唐 759	1	0.13
太平通宝	北宋 976	2	0.26
淳化元宝	唐 990	2	0.26
至道元宝	唐 995	5	0.64
咸平元宝	唐 998	6	0.77
景德元宝	宋 1004	6	0.77
景徳通宝	宋 1004	1	0.13
祥符元宝	宋 1008	27	3.45
祥符通宝	宋 1009	27	3.45
天祐通宝	宋 1017	13	1.66
天聖元宝	宋 1023	12	1.53
天聖通宝	宋 1023	1	0.13
明道元宝	宋 1023	2	0.26
景祐元宝	宋 1034	4	0.51
皇宋通宝	宋 1039	34	4.35
至和元宝	宋 1054	1	0.13
嘉祐元宝	宋 1056	2	0.26
嘉祐通宝	宋 1056	4	0.51
治平元宝	宋 1064	7	0.90
熙寧元宝	宋 1068	26	3.32
元豊通宝	宋 1078	24	3.07
元祐通宝	宋 1086	27	3.45

銭貨名	初 鑄 年	枚 数	出土率(%)
銅聖元宝	宋 1094	8	1.02
紹聖通宝	宋 1094	2	0.26
元符通宝	宋 1098	7	0.90
崇寧元宝	宋 1101	12	1.53
大觀通宝	宋 1107	3	0.38
政和通宝	宋 1111	11	1.41
宣和通宝	宋 1119	2	0.26
紹興元宝	南宋 1131	1	0.13
正隆元宝	金 1158	1	0.13
淳熙元宝	南宋 1174	1	0.13
紹興元宝	宋 1190	1	0.13
慶元通宝	宋 1195	1	0.13
嘉泰通宝	宋 1201	1	0.13
淳祐元宝	宋 1241	1	0.13
人中通宝	明 1361	1	0.13
洪武通宝	明 1362	171	21.87
永樂通宝	明 1408	5	0.64
宣徳通宝	明 1426	1	0.13
洪徳通宝	安南 1470	1	0.13
有説不能		44	5.63
無文銭		69	8.82
ビタ銭		172	21.99
計		782	100.04

Fig.6 銭貨出土状態実測図



Ch. 3 銭貨内訳表

調査地	発掘層	No.1枚数	No.2枚数	No.3枚数	No.4枚数	計	率(%)
開成遺文	* 827	8	0	8	6	28	4.05
志込遺文	* 788	1				1	0.14
平手遺文	武原 958				1	1	0.12
藤原宮文	* 990				1	1	0.09
三浦宮文	* 980			1	3	5	0.32
藤原宮文	* 988			2	2	5	0.32
野洲宮文	* 994	3		0	1	6	0.21
林野宮文	* 908	8	9	8	2	27	3.51
野洲宮文	* 989	2		11	6	20	2.66
天福宮文	* 1017		3	4	2	10	1.31
天福宮文	* 1003	3	4		2	9	1.30
天福宮文	* 1023			1		1	0.14
野洲宮文	* 1027				1	1	0.12
野洲宮文	* 1041		1		2	4	0.49
野洲宮文	* 1039	3	10	10	6	31	4.05
三浦宮文	* 1064						0.14
野洲宮文	* 1094						0.14
野洲宮文	* 1066	1	2		1	4	0.26
三浦宮文	* 1064		2	3	1	6	0.27
野洲宮文	* 1068	8	4	9	6	27	3.53
三浦宮文	* 1093	3	0	4	9	21	3.04
三浦宮文	* 1060	2	8	4	9	23	3.18
野洲宮文	* 1094	1	3			4	0.27
野洲宮文	* 1094						0.14
野洲宮文	* 1096	1	1		2	5	0.23
野洲宮文	* 1126		8	2	1	11	1.49
野洲宮文	* 1127						0.14
野洲宮文	* 1114	3	3	0		6	0.45
野洲宮文	* 1119				1	1	0.14
野洲宮文	* 1121						0.14
野洲宮文	* 1128	1				1	0.14
野洲宮文	* 1174						0.14
野洲宮文	* 1189				1	1	0.14
野洲宮文	* 1190						0.14
野洲宮文	* 1201			1		1	0.14
野洲宮文	* 1202						0.14
野洲宮文	* 1408	2	1			3	0.20
野洲宮文	* 1426						0.14
野洲宮文	* 1437						0.14
野洲宮文		18	15	5	0	38	5.06
野洲宮文		14	16	18	12	60	8.00
野洲宮文		87	34	87	33	241	31.85
計		138	85	107	142	572	75.81

銭貨No. 略図



が、ここでは基本となっているようで、これが経済活動上の単位とは考えがたく、宗教に關係する単位と思われる。重量による比較もしてみたが、No.1～No.4までと、教珠に共伴した69枚の錢貨との相関關係は見られなかった。ちなみに、館平場から出土している繻状錢貨は、一層が100枚前後で構成されていることが多い。しかし、昭和58年度調査時に出土した903枚は、12～13本の層で出土しており、今回と同様の例と考えられるかもしれない。今後さらに類例の調査・検討を行ってゆきたい。

(7). 仏具について (Fig. 7・8, PL. 14・15)

仏具は、教珠と塔婆が出土している。

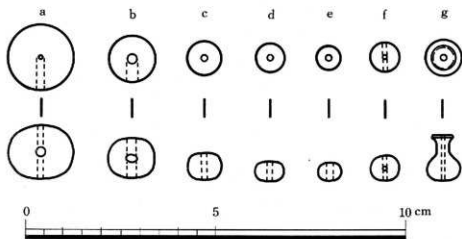
a. 教珠 (Fig. 7, PL. 14)

教珠は木製でSH01第14層から出土している。検出時は出土層の黒色土層と見分けがつかず、共伴した錢貨が検出された段階で教珠も確認した状態であり、周囲の十や堀り上げた土は改めて精査しているが、遺失したものもあると思われる。結果、周囲及び堀り上げ土から検出したのは、45顆、出土状態がとらえられたものは76顆、計121顆の川土となった (PL. 14)。

出土状態は、錢貨69枚に2つ折りにした教珠をからめた状態となっており、錢貨の下からも連なった状態で珠が出土している。珠は現在確認している段階で、7種に分けられる。以下、各種について概要と数量を述べた上で教珠について考察してゆくものとする。なお、共伴した錢貨の内訳は付表 (Ch. 4) で載せておくが、教珠が動いていない状態や、繻状の出土錢貨との関係から、当初から69枚であったと言えよう。

- ①実測図 a (Fig. 7-a) は、直径17mm、厚さ14mmの珠で、直径1.5mmの穴が貫通し、それにあたるようT字形に側面から中央まで直径2.5mmの穴が穿たれる。1顆の出土で、大母珠と思われる。
- ②実測図 b (Fig. 7-b) は、直径12mm、厚さ11mmで、①同様に直径2.5mmの穴が貫通し、T字形に2×3mmの穴が側面から穿たれる。1顆の出土で、小母珠と思われるものである。
- ③実測図 c (Fig. 7-c) は、直径9mm、厚さ7mm、直径1.5mmの穴が貫通するもので、103顆出土している。成珠と思われる。
- ④実測図 d (Fig. 7-d) は、直径7.5mm、厚さ5mmで、直径1.5mmの穴が貫通するもので、2顆出土している。材質、外觀的には区別がつかず、確実性に欠けるが、四天珠の可能性もあると思われる。
- ⑤実測図 e (Fig. 7-e) は、直径6mm、厚さ4.5mmで、直径2mmの穴が貫通する。12顆出土しており、記子と思われる。

Fig.7 数珠実測・出土状態図



Ch.4 数珠伴出銭貨内訳表



銭貨名	初 鑄 年	枚数	出土率(%)
開元通宝	唐 621	3	4.35
咸平元宝	北宋 998	1	1.45
景德通宝	" 1004	1	1.45
祥符通宝	" 1009	1	1.45
天禧通宝	" 1017	1	1.45
天聖元宝	" 1023	3	4.35
皇宋通宝	" 1039	2	2.90
治平元宝	" 1064	1	1.45
熙寧元宝	" 1068	3	4.35
元豐通宝	" 1078	3	4.35
元祐通宝	" 1086	5	7.25
紹聖元宝	" 1094	2	2.90
紹聖通宝	" 1094	1	1.45
元符通宝	" 1098	2	2.90
聖宋元宝	" 1101	1	1.45
政和通宝	" 1111	1	1.45
宣和通宝	" 1119	1	1.45
大中通宝	明 1361	1	1.45
洪武通宝	" 1362	15	21.74
判読不能銭		2	2.90
無文銭		7	10.14
ビタ銭		12	17.39
計		69	100.02

⑥実測図 f (Fig. 7-f) は、直径7.5mm、厚さ6.5mmで、直径1mmの穴が、縦位と横位に交差して貫通している。1顆のみの出土で、浄明珠の可能性があるとと思われる。

⑦実測図 g (Fig. 7-g) は、珠部直径9mm、厚さ12mmで、側面からは花瓶形となる。縦位に直径1mmの穴が穿たれている。1顆出土しており、記子留(露)部分の可能性が考えられる。

以上、概要を述べたが、通常数珠では成珠が108顆、四天珠4顆が含まれることから、今回の数珠については、ほぼ1個体であると思われる。数珠の形式としては、①母珠・記子ともにならないもの。②1母珠で記子10顆又は20顆のもの。③2母珠で向母珠に記子10顆ずつを付けるもの。④2母珠で1母珠に記子10顆又は20顆。もう一方の母珠には紐のみ。⑤2母珠で、1母珠に20顆の記子、他の母珠に10顆の記子と他に10顆一連とした記子をつけるもの。⑥いわゆる輪数珠といわれるもの。この他にも各宗派により様々な形態がみられる。今回出土の数珠は、この中では③又は④の形式になると思われる。⑤については、現在日蓮宗専用となっているが、近世になってからの出現と思われることから除外して考える。③については真言宗系統の数珠とされ、④については、真言、天台、浄土、日蓮各宗で用いられているという。浪岡城跡からは、発掘調査により五鈴杵、金剛板、六器、鉦等が出土しており、密教が一部でかなり浸透していたことがうかがえる。なお、数珠の樹種については鑑定を受けていないが、一般的に木製の場合は、菩提子・木樨子・蓮華子・金剛子・香木・他様々な樹木・種子が用いられている。

〔参考文献〕

仏教考古学講座 Ⅲ「仏法具羅く上」(八木直道 昭和45年11月25日発行 雄山閣出版)

b. 塔婆について (Fig. 8, PL. 15)

塔婆はSH01の第16層上面から出土している。SH01は前出のとおり、中土壘の十留が板杭によりなされている。出土当初は倒れた板杭として取り上げたが、洗浄後塔婆であることが明確になった。形状は山形の尖った頭部を有し、頭部側面に二つの刻みがみられる。文字に墨痕は残らず、墨書の痕がわずかに盛り上がっているのみである。また、縦に三分割されており、下部も切断されていることから、全体の大きさは不明であるが、残存部分は長さ90.4cm、幅12.0cm、厚さ2.4cmのかなり大きなものである。出土状態からは、塔婆としての使用時に倒れた状態や廃棄した状態とは考えがたく、三分割し、頭部を下にし板杭として使用し、下部の余った部分を鉈等の刃物で切断したものが、崩落したと判断するのが妥当であろうと思われる。

内容については、墨痕が残っておらず赤外線撮影も無理であると判断し、墨書面に平行に光をあて、わずかに浮き上がっている文字痕に影をつける方法をとった。これは、以前柿経が出

土した際、同様の状態であったものに効果のあった方法である。この方法により、図の様な文字が浮かび上がってきた。頭部側面の刻みからは二条の線がひかれ、中央に「〇題」と見える二文字、左に小さな文字で「念定捨福」と見える四文字が一段、二段目に「大白〇具足(疋)」と見える四又は五文字が書かれ、下部中央に「ㄱ〇」の二文字がみられる。裏面に文字痕はみられなかった。これらが正しい読みか否かあるいは何を意味するものか、現段階では不明であり、今後調査・研究を進めてゆきたい。

また、通常の塔婆であれば経文の一部又は全文が二列等で書かれることが多いが、今回の塔婆は、様式が板碑状になっている。しかし、種子の書かれる位置には文字が書かれており、塔婆自体の大きさや内容の書式から、塔婆の細分類は考えがたく、ここでは単に塔婆としておく。

4. まとめ

昭和63年度は、堀の小規模な調査であったが、城館各時期における堀の機能と形態、そこから城館の盛衰や経済活動等多様な事項が推定されるに至った。堀の形態の変遷からは、防御施設として堀削りを行い構築された城館が、次第に防御施設の様相を薄くしてゆき、生活を重視した形となってゆく課程がみられる。16世紀前半が防御と生活の調和が最もとれた時期ではなかったかと思われる。16世紀末の落城期、城館側よりも城館の外側の堀に遺物が多く、遺物の量＝人口と単純に考えれば、城館内よりも周辺の方が人口が増加していた可能性も考えられ、浪岡城落城は以外に簡単だったのかもしれないという考えが頭をもたげる。

また、仏法具の出土は、従来から調査に伴い密教関係の遺物が出土しており、城内での加持祈禱が考えられ、関連遺構の見直しが必要になっている。ここで述べる密教は、真言・天台いずれかは判断できない。しかし一方では、現在までに出土した仏法具がすべて城館期に用いられたものとは必ずしも言えない。浪岡城跡内館からは城館期以前の12～13世紀のかわらけが多量に出土している。今年度出土遺物が城館期前200年のものとは考え難いが、城館期になっても墓域や寺院等の施設が残っていたことは考えられよう。この見方では、例えば今回出土の塔婆について、新しいものを割って土留めに用いたとは考え難く、老朽化した塔婆を転用したと考える方が無難ではないだろうか。

いずれにせよ、発掘調査や環境整備を行ってゆく上で、文献・資料の少ない中世浪岡における人々の姿が様々な方向から検討され、触れられるようになることが、今後の課題となろう。

写 真 图 版

PL.1 SH01 発掘状況



PL.2 SH02 発掘状況



PL.3 木製品等出土狀態

右：農具出土狀態



左：曲物出土狀態

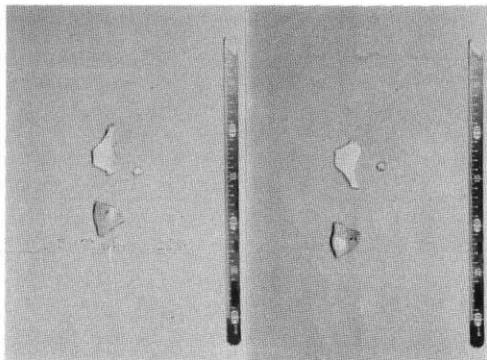
右：繩物出土狀態



PL.4 木製品・数珠・鏡貨出土状態

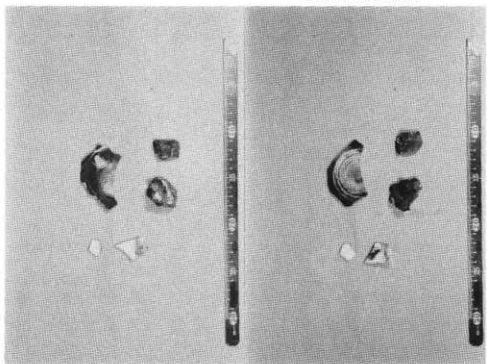


PL. 5 第2層・第9層出土陶磁器

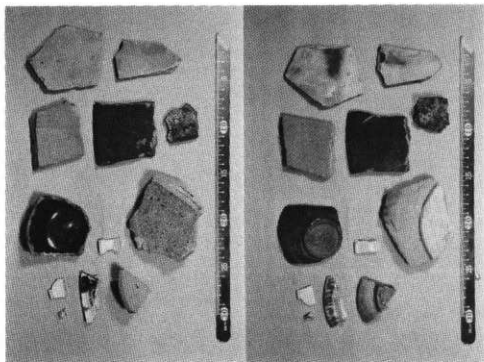


上：第2層出土陶磁器

下：第9層出土陶磁器

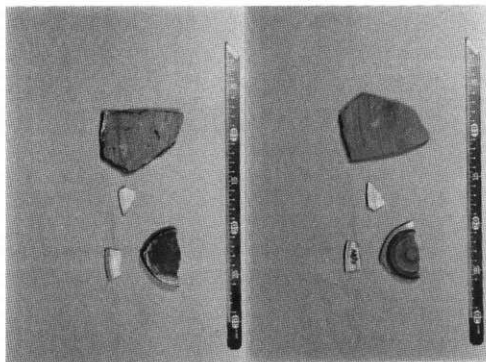


PL.6 第10層・第12層出土陶磁器

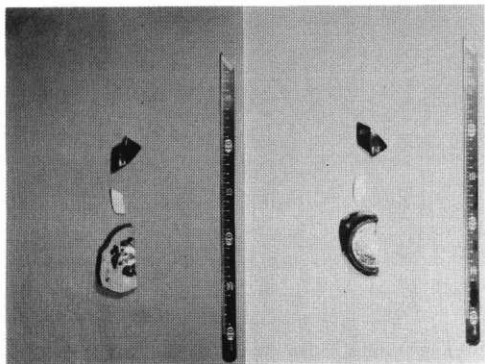


上; 第10層出土陶磁器

下; 第12層出土陶磁器

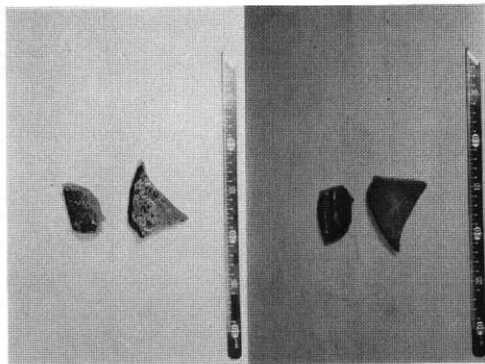


PL. 7 第14層・第16層出土陶磁器

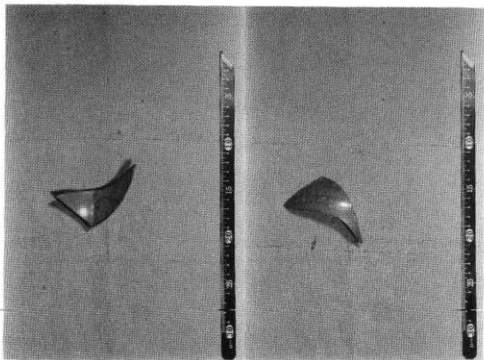


上: 第14層出土陶磁器

下: 第16層出土陶磁器

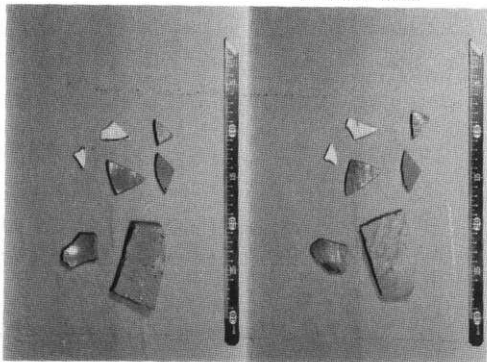


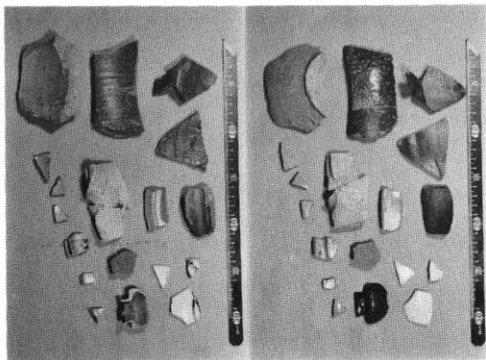
PL. 8 第19層・第41層出土陶磁器



上; 第19層出土陶磁器

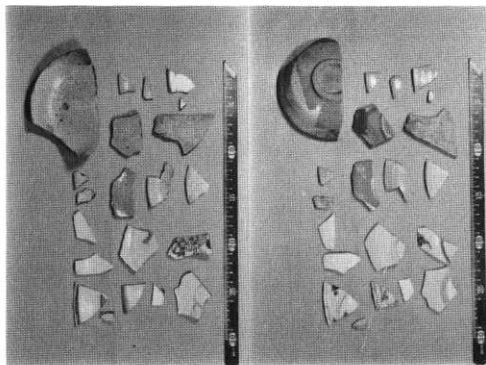
下; 第41層出土陶磁器

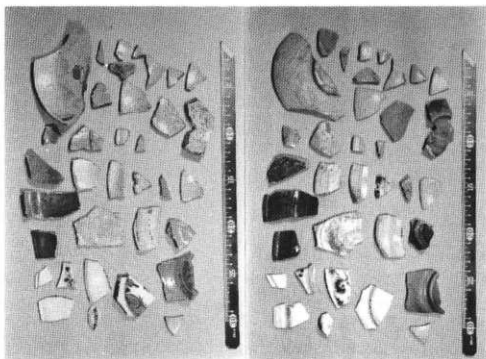




上：第45層出土陶磁器

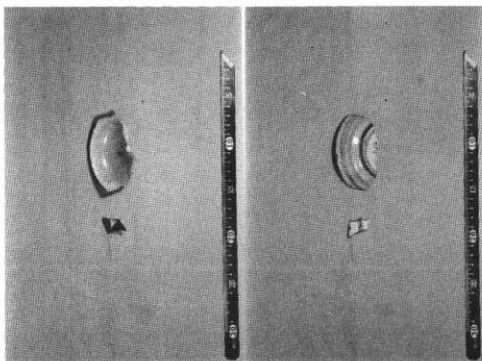
下：第47層出土陶磁器



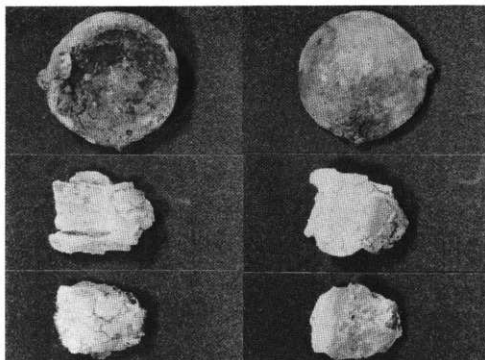


上; 第48層出土陶磁器

下第54・55層出土陶磁器

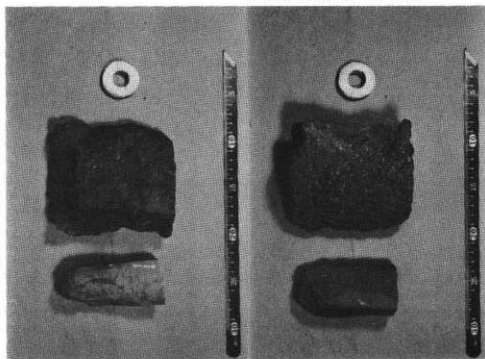


PL. 11 埴埴・羽口・石製品

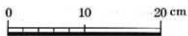
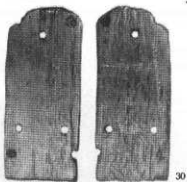
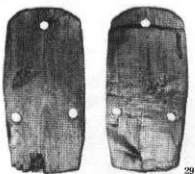
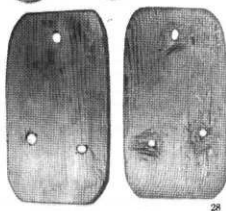
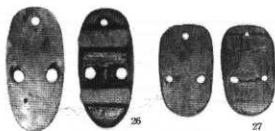
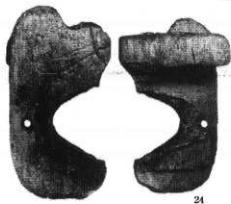
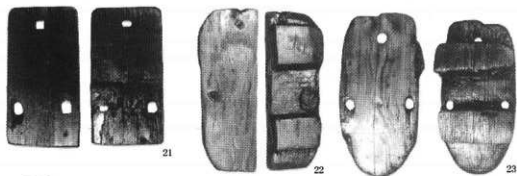


上; 上から埴埴・羽口

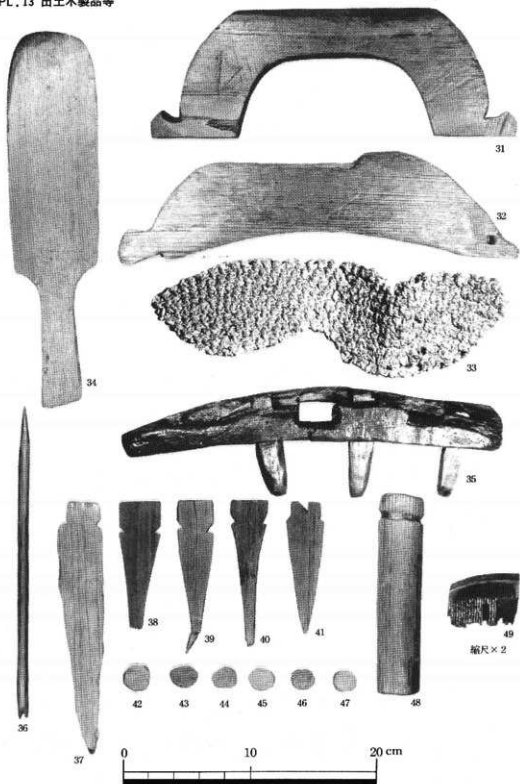
下; 上から穴明き石・白・砥石



PL. 12 出土木製品 (下駄)



PL. 13 出土木製品等



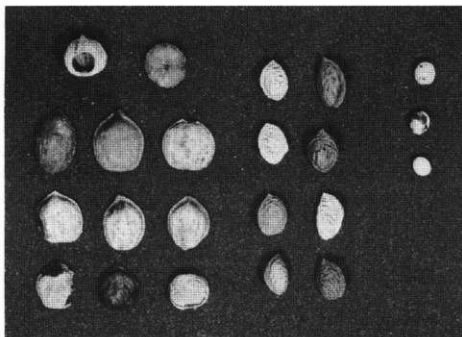
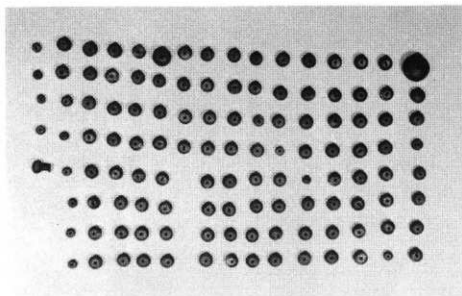
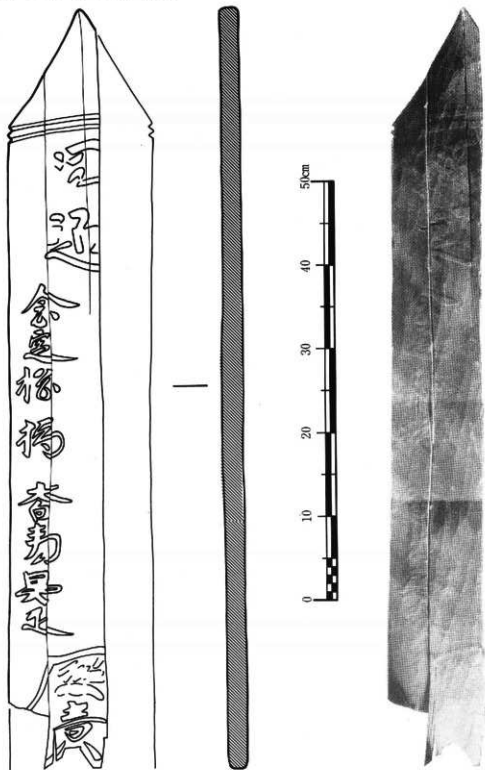


Fig. 8, PL.15 出土木製品 (塔婆)



史跡浪岡城跡
環境整備報告書 I

平成元年 3 月 29 日 印 刷

平成元年 3 月 31 日 発 行

発 行 浪岡町

浪岡町教育委員会

印 刷 津軽新報社

